

“車に乗ったらシートベルト” 大人も必ず着用しましょう

自動車乗車中の交通事故死者数は、全体の交通事故死者数の4割以上を占めています。そのうちシートベルトを着用していなかった人はおよそ65%にのぼり、シートベルトをつけていれば助かったと思われる事故が数多く見受けられます。シートベルトの必要性について、もう一度考えてみましょう。



①衝突力はビルからの落下と同じ

自動車がぶつかったときの衝突力は極めて大きく、例えば時速60kmで走っている車が壁にぶつかったりするとその衝撃は高さ14m（ビルの4階の高さ）から落ちたときと同じです。

②車外に投げ出されることも

シートベルトを着用していないと、衝突の勢いでフロントガラスに激突したり、車外に放り出されたりすることもあります。シートベルトの着用には、このような被害をより小さくする効果のほか、正しい運転姿勢を保つことで視界が広がり、安全運転ができるなど事故防止の効果も期待できます。

③乗る人全員が必ず着用

シートベルトはあなたを守る命綱です。「車に乗ったらシートベルト」を合い言葉に、前席、後席にかかわらず、車に乗る人は全員が必ず着用するように習慣づけることが大切です。

④正しい着用こそが命を守る

シートベルトは正しく着用しなければ、十分な効果を発揮できません。

①腰骨を巻くように ②ベルトはよじれないように ③シートを倒さず深く腰掛けるようにして着用して下さい。

⑤シートベルトあってこそその エアバッグ

車にエアバッグが装着されていても油断は禁物です。エアバッグは、シートベルトが正しく着用されていなければ、その効力を発揮できません。

実 施

春の全国交通安全運動！

★スローガン

『思いやり みんなですすめる 交通安全』

★期間 5月11日（火）～20日（木）

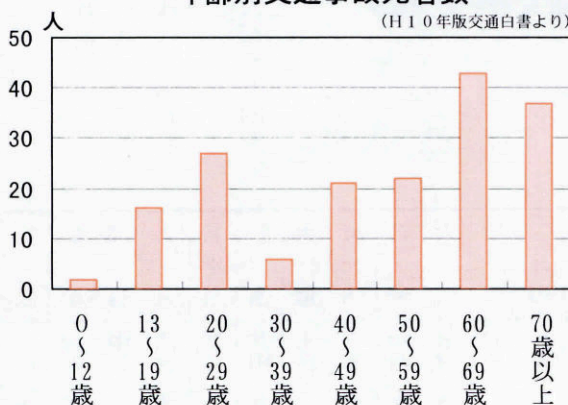
★重点目標

- 子どもと高齢者の交通事故防止
- シートベルトの着用の徹底とチャイルドシートの着用促進
- 交差点の交通事故防止



年齢別交通事故死者数

（H10年版交通白書より）



お年寄りの皆さんは、まずそれを認識して下さい。時代は変わっても、社会のルールやマナーの多くは、お年寄りが教えてきたものです。いつまでも、次代を担う子どもたちや若い人の交通ルールやマナーのお手本となして下さい。

お父さんが車を運転し、助手席のお母さんはひざの上に幼い子どもを乗せている。どこでも見られる微笑ましい光景です。

しかし、急ブレーキをかけたたり交通事故に巻き込まれたりしたとき、ひざの上の子どもはどうなるでしょう。親はシートベルトをしているので、命が助かることが多いでしょう。しかし、子どもはお母さんに抱かれている状態で前に激突します。顔はダッシュボードにめり込み、さらにお母さんのエアバッグ代わりとなってしまうのです。

こうした事態を防ぐため、子ども用のシートベルト装置、チャイルドシートの普及が進められています。万一の事故から子どもたちの命を守るのは、大人の役割です。「めんど

「抱いているから大丈夫」で
子どもは本当に安全なのか

幼児用シート
（4か月～4歳）



乳児用ベッド
（0～12か月）

くさい」「子どもがいやがるからしない」のではなく、小さいときから子どもにチャイルドシートやシートベルトの着用に慣れさせ、必要性を理解させることが大切なのです。